

# 英語新カリキュラム全学化の経過と課題

英語教育センター 渡部友子

## はじめに

英語教育センター（以下「センター」）は2015年4月に発足し、今年度が5年目である。初動2年間の準備期間（2015年度末と2016年度末に本誌で報告済）を経て、2017年度に経済・経営・法・工学部で新カリキュラム（以下「新カリ」）が開始され、センターの主たる業務である必修英語教育の組織的運営が本格的に始まった。その後2年間でどのようなことが実施され、どのような問題が発生し、それにどう対処してきたかは、2017年度末と2018年度末に本誌で報告した。2019年度は、新カリが文学部2学科と教養学部4学科で開始され、全学化した初年度である。本稿では、全学化の進行経過と今後の課題を報告する。なお、本稿の内容は筆者の私見をベースに構成されており、センターの了承を得て発表するものではない。

## 1. 2018年度末の到達度テスト

2018年度は、先行4学部において共通英語の新カリが完成する年度であった。2019年1月の到達度テストでは、上位群にのみTOEIC L&Rを実施する、というプロジェクトが行われた。これは、その前年度のTOEIC Bridge試行実施において、上位群の得点が入学時より下がったという結果を受けて提案されたもので、学長教育改革研究助成金の援助を受けて行われた。その結果は2019年3月に別途報告済みであるが、その概要をここで説明する。

TOEIC L&Rはリスニングとリーディングを2時間で測定する試験であり、990点満点でスコアが出る。この試験を、経済・経営・工学部の「英語IIB」をグレードaで履修していた者のみを対象として2019年1月10日に実施した。法学部を除外したのは単なる予算不足による。泉と多賀城で計138名（内訳は経済学部44名、経営学部42名、工学部52名）が受験し、監督にはセンター特任講師が当たった。

結果は予想に反し、高得点がほとんど見られなかった。1名が745点（Bridgeで160点以上に相当）を獲得したが、600点台はゼロ、500点台が15名であった。入学時の英語力を維持できたと言えるのはこの辺りまでであり、400点台が47名、300点台が54名、200点台が21名であった。受験者を上位群から抽出したにもかかわらず、得点が上方に偏らなかったことがわかる。また、2名を除く全員において、リスニングのスコアがリーディングのスコアを上回っていた。

得点が伸び悩んだ要因には、少なくとも次の二点が関係しそうである。まず、試験がリスニング45分の後にリーディング75分という構成になっていて、長時間に及ぶため、集中力低下が

起こった可能性がある。監督をした特任講師は、後半は問題を読まずに答えをマークしていた学生が少なからずいた、と報告している。もう一点は、テスト形式に慣れていないことである。TOEIC L&Rでは、必要な情報を素早く取り出す読み方が求められる。もし授業で精読を中心に指導されているとすれば、このテストでは不利に働く可能性がある。いずれにしても、今回の結果からは、本学でTOEIC L&Rを到達度テストとして使用することは、上位群であっても適切ではないという結論を得た。

上記試験の後の1月19日(土)には、L&R受験者を除く全学2年生を対象に、到達度を測定するためにTOEIC Bridgeが実施された。これは通常予算による執行であり、センターとしては初めての大規模実施である。監督業務には、センター専任教員と特任教員のほか、非常勤教員と学生アルバイトの協力を得た。合計1854名が受験し、全学の受験率平均は74.5%であった。新カリ4学部ではスコアが英語IIBの成績に算入されるため、受験率は平均85%だった。受験率を下げたのは、成績に影響のない旧カリ2学部、特に教養学部である。

先のL&Rの得点をBridgeの得点に換算し、学科ごとの平均点を入学時と比較してみたところ、2学科を除き、軒並み低下したことが判明した。最大で7.8点低下している。例外は英文学科と言語文化学科で、前者は2.7点上昇、後者は増減なしであった。この2学科に共通しているのは、入学後の2年間で履修できる英語科目が、必修4科目以外に複数提供されていることだ。

初めての全学到達度テストの結果が示唆していることは、週1回の授業を2年間続けるだけでは、入学時の英語力を維持するのさえ難しいかも知れないということである。センターで新カリを設計した際、2年間の教育で入学時の英語力をCEFRで1段階上げる(例えばA1をA2に、A2をB1に)ことが可能と想定していたが、この見込みは甘かったと言える。

余談ではあるが、19日のテストの欠席者が想定より多く発生したため、その扱いには苦慮した。新カリの英語IIBの成績算出は、教員による評価が8割、到達度テストのスコアが2割となり、テストを受験しなかった者は評価点8割だけで合否を決めることになっている。しかし今回は受験機会が1回しかなく、方針通りにすると不合格者が多数発生する恐れがあった。そのため事後に方針を緩め、欠席者の成績は、欠席理由にかかわらず評価点の9割で出すことにした。なお2019年度の実施案では、対応が改善されている。

## 2. 2018年度末に発生した成績疑義の問題

後期の「英語IIB」の成績が発表された段階で、新カリ学部で不合格になった学生から複数件の疑義が担当教員に向けて出された。これは主に、原級止め、つまりこの科目を落としたために3年生に進級できない状況になった者が、「なぜこの点数なのか」の説明を教員に要求した、という事態である。事態の発生は想定内であったが、教員の説明に学生が納得しなかったため、

センターが介入して対応に当たり、収束には春休み終盤までを要した。

問題が深刻化した要因はいくつか考えられる。まず担当教員側の認識不足である。自分の担当科目だけの成績判定をしているという教員の認識は正しいが、進級や奨学金を左右するなど、波及要因が存在する可能性は知っておく方がよい。その意識があれば、学生から成績に関する疑義が出る可能性も予想できるからである。必要なのは、苦情が出ないように甘く評価することではなく、苦情にひるんで評価を修正することでもなく、出した評価を明確に説明する準備である。今回複数の疑義を出された教員は、この準備が欠けていたようだ。

次に挙げられるのは、新カリの成績評価制度の統一化と複雑化である。新カリの共通英語では、グレードにより最高点と中央値が決められているので、各教員は素点を補正する必要がある。さらに「英語IIB」においては、先述の到達度テストの得点を成績に組み入れるため、計算がやや複雑になる。一方で、素点の内訳をどういう構成にするかは、授業内容とともに各教員の裁量に任されているため、同学部の同グレードでも成績評価結果が異なり、合格率が多少異なる、という実態がある。このことが学生の不満につながり、疑義の発生件数を増やしている可能性がある。

最後に、原級止めという制度自体の問題を指摘する。2018年度の「英語IIB」で過年度に比べ疑義が多くなったように思われるのは、この科目だけを落とす学生が増えたからではあるまいか。以前の傾向としては、必修英語を落とす学生は専門分野の必修科目も落としていることが多かった。したがって、そういう学生を進級させない制度には道理があった。しかし、もし他の単位が順調に取れていて成績も悪くない学生が、必修英語だけを何らかの理由で落とした場合、それだけで進級の道を閉ざされることを不合理と思うのは当然である。その不満が今回、英語教員に向けられたという側面もあるように思われる。

今回発生した問題は、原級止め制度を有していた2学部と共有され、改善案が検討された。その結果、経営学部では2019年度入学生から原級止め制度を廃止することが決定された。一方、経済学部では制度を維持するが、その対象科目から「英語IIA」と「英語IIB」を外すことになった。つまり、1年生必修の「英語IA」と「英語IB」の不合格者が再履修で再度不合格になった場合は、これまで通り3年次に進級できないが、「英語IIA」と「英語IIB」の不合格者は、他に問題がなければ進級が認められることになる。

この新制度は2018年度入学生には適用されない。しかし何も手立てを講じないと、旧制度の不具合を知らながら放置する形になってしまう。そこでセンターでは上記2学部と協議し、2019年度に限り年度末の「進級再試験」制度を復活させることにした。詳しくは第5節で後述する。

### 3. 2018年度末のその他の活動

春休み中の2019年2月には、全英語教員（非常勤・専任を問わず）を対象に2時間のFD研修が行われた。テーマは「4技能の指導」である。なぜ4技能と言われるようになってきたのか、どんな指導法が存在するかなど、情報提供を中心に行われた。

その後、センターでは新2年生のクラス配属の調整を行い、掲示で発表するとともに、履修登録作業を事務職員が行った。特に大きな問題は発生しなかったように記憶しているが、休学者や退学者の情報を集めにくいという問題は残っている。

なお、特任講師の新規採用については、公募を経て2名を採用候補者としたが、両者とも辞退するという結果に終わった。同時に、採用後3年を経過する1名が任期更新を希望しなかったため、2019年度は特任講師が4名から3名に減少することになった。一方、事務職員については、1名が新規にセンター配属となったが、元々いた1名に対し2019年度から国際交流課との兼務という辞令が出たため、実質0.5名増にとどまった。

### 4. 2019年度入学時プレイスメントテスト実施と全学のクラス分け

TOEIC Bridgeは、前年度と同様、新入生オリエンテーション初日の午前に実施された。泉では実施本部に渡部、岸、特任講師3名が入り、多賀城では宮内啓介新所員に統括をお願いした。全学の受験者総数は2733名で、所属コードのマークミスは35名、受験番号のマークミスは45名であった。ただし、経済学科2Gの全員が所属コード未記入であった。これは、監督者がその部分の指示を漏らし、もう一人の監督者もそれに気づかなかったということであり、監督者のミスである。当日欠席して受験しなかった者は10名未満であり、オリエンテーション期間中に個別にセンターから連絡して「何らかの英語検定」のスコアや合格証の提出を求めた。小学生の時に受験した英検の低い級の合格証を提出する者がいたことは予想外だったが、級や受験時期の限定はなかったため、認めてグレードdに配属した。指定期日までに応答がなかった者は、グレードeに配属された。

2019年度からは、英文学科と教育学科を除く全学科のクラス分けをセンターで行い、配属発表と履修登録作業を授業開始に間に合わせなければならない。前年度に経験した作業集中を緩和するため、今年度は、グレードe（「ベーシック英語」）配属者だけを最初に確定し、オリエンテーションキャンプでそれを対象者に知らせる、という方法をとった。それは、このグレードだけが特別な時間割になるため注意の促しが必要だから、というのが主たる理由であるが、それと同時に、グループ主任などを通じて何らかの指導をしないと、英語学習への態度に影響が出るだろうとの考慮もある。これは工学部での指導実績に基づく。ただし、各学部で指導がうまく行ったかは不明である。教養学部ではグレードeの名簿を筆者自身がキャンプ会場で発

表したが、「何かの罰ゲーム」という雰囲気ですら深刻に受け止められなかった学科もある。

グレードaからdまでの配属は、授業開始日が早い学部学科から順番に作業を行った。日程の見通しは、新生に配布した「履修ガイド」の最終ページに印刷されていた。実際には、予定よりも早く作業が完了した。これはひとえに、事務職員の能力と努力によるものである。

2019年度入学生の平均点は、全体的に前年度よりさらに微増したため、上のグレードのクラスが不足気味になる傾向は今年も見られた。また、学部間でクラスサイズの不均衡があるため、開講クラス数を増減したがよさそうであることも判明した。これは、のちに2020年度の開講案を決定する際に反映された。

## 5. 進級再試験制度の限定復活

先に述べたように、経済学部と経営学部において、原級止め制度の廃止または変更が2019年度入学生から適用されるため、それ以前に入学した学生の進級条件が相対的に厳しく感じられてしまう。制度移行期のこの不公平感を緩和するため、2019年度に限定して進級再試験を実施することになった。ただし適用は、制度変更があった上記2学部限定し、対象者は2017年度以降に入学した者、つまり新カリになってからの学生に限定する。また対象科目は「英語IIA」「英語IIB」のみとする。

手続きは以下の手順で行う。まず、上記の限定に該当する履修者について、担当教員が英語教育センターに対し「不合格者」を報告し、その際に「再試験を認めるか否か」の判断を添付する。判断はセンターの指針に従って行い、例えば極端に点数が低いとか、過度の欠席があったとか、再挑戦を認めるに値しない場合は認めなくてよい。この報告書で再試験が認められた者が、年度末に申請をした場合にのみ、進級再試験が実施される。なおこの試験は、教員個人が自分で実施することを希望しない限り、作問と採点（成績判定）をセンターの責任で行い、結果は担当教員に報告される。

この特別対応については、前期終了前の7月、昼休みを利用して行った英語教員への説明会の中で周知を図り、前期末に「英語IIA」の再試験対象者は確定した。「英語IIB」に関しても、12月に実施した同様の説明会で再度触れ、後期の成績を提出する時期に報告を受ける予定である。受験者はそれほど多くならない見通しである。

## 6. シラバスの書き方に関するFD研修実施

過去2回のFD研修は、指導法に関するものであったが、2019年度は成績評価に関する内容で研修を行うことにした。その理由は、成績評価をめぐる学生と教員の間で起こる深刻なトラブルがなくなることにある。2018年度末に発生した事例は第2節で述べた通りであるが、

2019年度に入っても、センターの介入を要する事案が発生し続けている。当該学生と教員から事情を聞く限り、その原因は、成績評価に関する方針が明確でない、もしくは学生に十分に伝わっていないことにあるように思われる。加えて、途中の成績を知らされないまま学期末を迎えてしまうことも、事後の疑義を生む要因になる。「知らなかった」は学生の典型的な主張であり、「こちらは説明した。知らない方が悪い」と切り捨てることも可能である。しかし「知らなかった」と言わせないよう教員が手立てを講じることが、トラブルを未然に防ぐ手段ではないか。センターではそのように考え、これをシラバス設計に反映させるための研修会を実施することにした。日程はシラバス執筆前の12月14日であった。

研修会で伝えたいことは2つあった。1つは、シラバスの記述が年を追うごとに細目化する傾向について、その背景と趣旨（大学行政に関わる部分）を理解してもらうことである。もう1つは、英語授業のシラバス設計において、目標をどのように立て、その達成度をどのように評価するのかを、明確に意識してもらうことである。強調されたのは、どんな課題を出すのか、それをどの程度できたら、どんな評価（何点）になるのかを、なるべく具体的に学生に示すこと、そして評価結果を定期的に学生に知らせることである。これは言い換えると、複数の評価項目と方法を設定し、形成的評価をするということだ。

センター長による上記の説明ののち、3～4名のグループで意見交換が持たれた。その中では、授業を細かく設計し、細かい指示を出し、細かく評価することに対する戸惑いの声も聞かれた。これは、今まで漫然と教科書に沿って進み、最後にテストをするというやり方をしていた教員ほど強く感じるのだと思うが、そのやり方がトラブルを招きやすいことも理解してほしいところである。一方、評価方法を適切に設計できるか不安だという声も上がった。具体的には、設計通りに評価すると不合格者が大勢出てしまう場合、どう調整すればよいのか、という問題提起である。確かに評価方法の設計は経験に依存するので、初めは上手くいかないことが多いだろう。例えば、課題の配点や基準設定を誤って成績が過度に高くなったり低くなったりしたことは、筆者にも経験がある。シラバスの設計が実情と合わないことが判明したときは、そのまま押し通すのではなく、受講者に説明した上で途中変更した方がよいだろう。

この研修会の成果は、2020年度のシラバスを見て判断することになろう。成績評価で学生と揉めた経験がある教員には全員参加してほしかったが、そうはならず残念である。

## 7. 2019年度末の到達度試験実施

本年度の全学2年生対象のTOEIC Bridgeは、2020年1月11日（土）と17日（金）の2日間で実施することにした。これは、受験日が1日のみだった前年度に起こった障害（第1節参照）を踏まえた変更であり、11日に欠席しても17日の受験が可能になる。ただし17日の試験を欠席

した者には代替日がないので、土曜日に授業がある者や、成人式等の特別な事情がある者以外には、11日の受験を促す方針とした。11日に受験予定の者が、もしインフルエンザや交通障害等の事由により受験できなくなった場合、17日の受験が認められる。

このことに関する学生への通知を一斉に行うため、本年度はmanabaに「共通英語」用のタイルを作成し、英語教育センターから発信できるようにした。これも前年度からの改善点である。まず11月に、1月のTOEIC Bridge実施を「英語IIB」履修者に一斉通知し、11日と17日のどちらで受験するかを、Googleフォームを利用して申告するよう指示した。これは、両日の受験者の概数を把握して実施準備をしやすくするためである。回答期限は通知から3週間後とし、無回答の者は11日受験が確定する、ということにした。

希望調査の結果、17日の受験者が泉キャンパスで845名、多賀城キャンパスで104名となった。予想より多い受験者だが、監督にはセンター実施委員会の教員（センター長を含む専任6名と特任3名）が当たる。11日の受験者は、泉で1470名、多賀城で330名となる。この監督には、上記実施委員会のメンバーに加えて、非常勤講師9名と学生補助6名の協力を得る。なお文学部と教養学部については、このテストのスコアが成績に影響しないので、特に11日の実受験者は上の数字より低くなると予想する。

12月初旬には、両日の集合時刻と集合場所、欠席や遅刻が発生した場合の手続きの仕方などを、manabaから一斉通知した。17日の受験者が増えすぎることを避けるため、欠席事由を厳格化し、「指定受験日を守らない場合はスコアが無効になる」との警告を加えた。そして自分の指定受験日を確認できるよう、17日の受験者リストを学生番号で作成して公開し、これ以外は11日受験だと念押しした。

今回の一連の手続きを通して、学事暦や2カ月先のことを把握できていない学生が少なからずいることが判明した。まず、受験日希望調査に回答しなかった学生数が全体の3割を占める。この数字には、回答しなければ自動的に11日になるからあえて回答しなかった者や、最初から受験する意志がない文学部・教養学部生も含まれるだろう。一方で1月の予定を11月に決めることが難しかった（考えているうちに期日が過ぎた）者も一定数いるのではないかと思われる。さらに驚いたのは、11日が土曜授業日であることや、17日が休講日であることを知らなかったという理由で、12月になってから受験日変更を希望する者が複数いたことである。先の計画を立てずに短い見通しで生きている学生は、我々が想像する以上に多いかもしれない。

## 8. 今後の課題

2020年度は、文学部と教養学部の新カリが2年目となり、センターが運営する共通英語の全学化が完成する年度である。したがって、2年生対象の年度末到達度試験の受験率は全体的に

高くなることが予想される。言い換えると、入学時に一斉実施するTOEIC Bridgeと同等の規模での実施を準備する必要があるということだ。到達度テストは、全学一斉でなく2日間に分けて実施するのが妥当と思われるが、次年度は監督者の不足が予想される。これまでは何とか非常勤教員と学生アルバイトを確保してきたが、日程が冬休み明けや休講日になるため、協力者を集めるのは容易ではない。今後は、入試と同等の手当を準備するなどして、専任教員（センター所員以外も含む）に監督に当たってもらうことができるよう、体制を整えることが望ましいと考える。試験実施日も調整が難しいので、最初から学事暦の中に入れてもらえるとうれしい。

授業外の学習支援も強化が必要である。現在、特任講師が「えいごりらうんじ」の名称で学習相談や勉強会などを実施しており、参加者の延数は毎年度200名を超えている。しかし、開室が特定の曜日と時間帯に限定されているので、利用したいが授業と重なり行けない学生は潜在的に多いのではないと思われる。次年度以降、泉キャンパスでは「らうんじ」を平日常時開室にし、相談に行けば特任講師の誰かが必ずいる体制にしたいと考えている。多賀城キャンパスでの常時開室は不可能だが、英語授業がある日の開室時間を長くする（特任講師が長く滞在する）ことは可能だろう。これとは別に、特定目的の勉強会（例えばTOEICの勉強会とか、英会話練習とか）は日時を指定して実施する。

必修英語を修了した3年生への学習支援も求められている。就職活動に向けて英語力をもう少し伸ばしたいと思う学生は一定数存在すると思われる。新カリでは、自由科目として「英語III」を開講し、TOEIC L&Rの対策を支援しようと考えたが、2019年度は受講者がゼロであった。次年度は周知方法を改善して開講を試みる予定である。集中講義という開講形態をとるのは、全学部対象の本科目を通常時間割の中に組み込むのが難しいからであるが、逆に他の集中講義と重なって履修できない状況を生んでいる可能性もある。将来的には、時間割に縛られずに空き時間で継続的に勉強してもらうために、対面授業ではなくe-learningでの開講を検討した方がよいかも知れない。

このほか上級学年への支援としては、希望者に対しTOEIC L&Rの学内実施を実現したい。本学はTOEIC実施法人に団体会員として登録しているため、通常より安い受験料で団体特別受験することができる。得られるスコアは公式とみなされないが、公式試験を受ける前にどんな試験かを知る、あるいは実力を試す機会にはなるだろう。例えば2月に土樋キャンパスで、就職活動を控えた学部3年生や大学院生を対象に、小規模実施をしてみてもどうかと考える。ただし、受験希望者をどのように募るか、受験料の徴収をどのように行うか、監督は誰がするのかなど、細部の検討が必要である。